

## セネカの書簡88におけるリベラル・アーツ批判

鈴木 円 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

### 1. はじめに

本論文の目的は、セネカ (Lucius Annaeus Seneca, c.4 BC-AD 65) の書簡88におけるリベラル・アーツ批判を詳細に検討することを通して、現代日本における教養教育のあり方に対する視点を得ることにある。

日本の新制大学においては戦後、アメリカのリベラル・アーツ教育をモデルに一般教育を教育課程においた<sup>2</sup>。その後、1991 (平成3) 年の大学設置基準の大綱化により一般教育科目の区分がなくなっ  
てからも、一般教育でめざされた理念は「教養教育」に受け継がれ、その在り方が検討され続けている。最近では、大学のユニバーサル化の影響もあってか、リベラル・アーツを標榜する大学や学部が増えてきている。リベラル・アーツ教育、あるいは教養教育は学術的なものでありながら、道徳的・倫理的な側面、すなわち人格形成に寄与するという側面が期待されている。学術と道徳がどのような教育において相育まれるのか、その問題はリベラル・アーツの歴史とともに古くから問い続けられている問題である。リベラル・アーツが注目を集める現代において、今一度、リベラル・アーツとはそもそもどのような教育を志向する概念であったのかを古典を通じて考え直すことは意味のあることであると思われる。本論文では、セネカが年若い友人ルキリウスに向けてリベラル・アーツとは何かを説き、リベラル・アーツの実情を批判し、あるべき姿を記した書簡88を読み解くことを通して、リベラル・アーツの意味を考えてみたい。

### 2. リベラル・アーツについて

リベラル・アーツは、その歴史をたどれば、古代ギリシア・ローマの学問を中世の大学が継承する形で中世の大学に取り込まれた、いわゆる七自由学芸 (septem artes liberales)<sup>3</sup>がもとになっている。七自由学芸は、5世紀のマルティアヌス・カペラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』により定式化されたものである。しかし、その理念は古代ギリシア・ローマを通じて、修辞学を重視して弁論家の育成をめざす考え方や幾何学を基礎として哲学への志向を目覚めさせようとする考え方など、さまざまな考え方を包含しながら形成されたものである<sup>4</sup>。

リベラル・アーツはラテン語の *artes liberales* をその語源とするが、この言葉を最初に用いたのはキケロ『発想論』1.35である<sup>5</sup>。そこでの *artes liberales* は初等教育をさす言葉として使われており、その内容については触れられない。一方、キケロは『弁論家について』1.17-23で、*artes liberales* という言葉こそ用いていないものの、弁論家の学ぶべきこととして、後のリベラル・アーツにつながる内容を書いている。キケロは、弁論には「万般にわたる広範な知識が獲得されなければならない (Est enim et scientia comprehendenda rerum plurimarum)」とし、「自由人にふさわしい教養 (eruditio libero digna)」の必要を説いて、次のように述べる。

わたしの考えるところ、誰であれ、あらゆる大事の知識、あらゆる学芸の知識を獲得しているのでなけ

れば、すべての美点をそなえた雄弁家とはなりえないであろうと思う。なぜなら、万般の認識によってこそ弁論は華々しく飾られ、豊かに満ちあふれるものにされなければならないからである。もしも、対象となる事柄が弁論家によって完全に把握され認識されていなければ、弁論は言わば空疎で、子どもじみた発言に墮してしまうのである。  
(キケロ『弁論家について』 1.20., 大西英文訳)

そして、『弁論家について』 3.127では、エリスのヒッピアスの言葉を引く形で、「自由人にふさわしい高尚な学問 (*liberales doctrinae atque ingenuae*)」として、幾何学・音楽・文学・詩人の蘊蓄、自然の事象に関する学術、人間の倫理に関する学術、政治に関する学術をあげている。さらに、キケロは「学識ある弁論家 (*doctus orator*)」を理想として、次のように述べる。

すべてにまさるものを一つだけ挙げよと求められるのなら、勝利の棕櫚の栄冠は、学識ある弁論家にこそ与えられるべきだとわたしは思うのである。その同じ学識ある弁論家が哲学者でもあることを許されるなら、論争は解決されたことになる。しかし、(哲学者たちが) あくまでも哲学者と弁論家とを切り離そうというのであれば、この点で彼らのほうが劣っているということになるだろう。すなわち、間然するところのない弁論家には彼ら哲学者たちの知識のすべてがそなわっているのに対して、彼ら哲学者たちの知識には雄弁は含まれていないということである。その雄弁を彼らがどれほど蔑もうとも、まさにその雄弁こそ彼らの学術に言わば有終の美を添える華を与えるものと思わざるをえないのである。

(キケロ『弁論家について』 3.143., 大西英文訳)

キケロは、優れた弁論家であることが目指すべき価値であり、そのために広範な学識が必要であると考えている。キケロは、哲学者よりも弁論家を高い位置に据えている。弁論家に価値を見出すことは、古代ギリシア・ローマ世界では自然なことである。なぜなら、自由人にとって最も重要な政治的手腕を発揮するためには、修辞学その他の学問を身につけ、いかに説得的な弁論を行って人々をひきつけるかにその成否がかかっていたからである。そのため、弁舌巧みな弁論家こそ、めざすべき有為の自由人の要件になるわけである。弁論に重きを置くこの考え方は、西欧の教育の伝統として生き続けている。最近の日本の教育界で西欧から論理的思考力やコミュニケーション能力といった概念が取り入れられているが、その底流には修辞学重視の考え方がある。中世以来の大学で自由学芸が取り扱われてきた背景のひとつには、このような修辞学を重視する伝統がある<sup>6</sup>。

ひるがえって、日本においては、修辞学を重視して弁論巧みな人を育成することを教育目標として捉える伝統ははっきりとは見られない<sup>7</sup>。日本においては、教育基本法第1条にあるように、教育の根本的な目標が人格の完成にあると考えられている。この人格という言葉は、道徳的な人格を想起させる。そして、その道徳においては、いかに話すかよりもいかに行動するか、つまり言葉よりも行いに重きが置かれている。この日本人の道徳観からすれば、弁論の巧みさは単なる技術にすぎないと考えられ、人格形成とは切り離して考えられてしまう。このことが西欧の教育観とのずれを生み、修辞学を西欧から取り入れはしたものの定着するには至らず、修辞学よりも哲学を重視する傾向につながったのではないか。しかしながら、この西欧と日本の教育観のずれは、一般にはあまり意識されていないように思われる。西欧が伝統的に、修辞学と哲学とを同等に重視してきたということはリベラル・アーツを考える際の前提として理解しておくべきことであろう。

### 3. セネカの書簡88について

ローマの政治家であり、ストア哲学者であるセネカは、政治から退いたのちの最晩年に、年下のルキリウスにあてた124篇の書簡を執筆している。この書簡は『倫理書簡集』としてまとめられており、その内容は多岐にわたるが、教育のあり方に触れたものも少なくない。とりわけ、書簡88は、キケロとは立場を異にするセネカが、哲学を重視する立場からリベラル・アーツを批判的に吟味した作品として名高い。この書簡88から、現代におけるリベラル・アーツ教育や教養教育に対して示唆を与えるいくつかの論点を取りあげて、深く掘り下げて考えてみたい。

### 4. 自由になるための学術としてのリベラル・アーツ

書簡の冒頭で、セネカはまず、「自由な勉学について (De liberalibus studiis)」、すなわちリベラル・アーツについて、「金儲けを目指すような勉学はどれも私は尊重もしないし善き学問にも数えない (nullum suspicio, nullum in bonis numero, quod ad aes exit.)」と述べる。そして、それら利益を求める勉学に関して、才能を準備させるものとしては有益だが、永続的なものではないとする。この考え方は、古代ギリシア・ローマを通じて一般的な考え方である<sup>8</sup>。自由人と自由人でない者のなすべきことは分けられており、賃金労働に属することは自由人のなすべきことではなく、美德にもむすびつかないと考えられている。したがって、自由人のための学術としてのリベラル・アーツには本来、生活の役に立つ教育や職業教育のような教育は含まれない。この労働観は現代の資本主義社会における労働観とは相容れないが、自由ということの意味を考える限り、考慮すべき点を持っている。なぜなら、金銭や利益追求は、人の自由を束縛する要因となっているからである。役に立つという価値や職業もまた、金銭や利益追求を目的とする限りは、同様に自由を束縛する。自由を束縛されている人間は自由人とは呼ばれない。

セネカは、リベラル・アーツを、あくまでも「美德」を求めるためのものであり、「美德」を対象とする学問である哲学を学ぶための準備と価値づけている。このセネカの考え方は単に古代ギリシア・ローマにおいて自由人と非自由人を分ける考え方に基づくのではなく、遥かに遠い射程を持っている。セネカは「なぜ自由な勉学と呼ばれるかは、ご存じだろう。自由な人間にふさわしいからだ。だが、真の意味で自由な勉学とは、人を自由にする学問、すなわち知恵に関わる学問であり、崇高で、力強く、気宇壮大な学問だ (Quare liberalia studia dicta sint, vides; quia homine libero digna sunt. Ceterum unum studium vere liberale est, quod liberum facit. Hoc est sapientiae, sublime, forte, magnanimum.)」と述べる。リベラル・アーツは自由人のための学問であるが、真の意味では自由人に「なる」ための学問だとセネカは捉えるのである。自由人とは通常、社会的な身分を指す言葉であり、古代ギリシア・ローマ世界では、基本的に政治参加を認められた、市民権を有する者と捉えることができる。そして、自由人は、例外はあるにせよ、基本的には世襲の身分である。したがって、学問や勉学によって自由人に「なる」ということは一般的ではない。では、自由人に「なる」とはどういうことだろうか。セネカは、自由人を固定された社会的身分として捉えるのではなく、「自由」を真の意味で保持している人間を自由人と考えている。そして、美德を目指すことによってのみ、人は自由を確保できると考えている<sup>9</sup>。

セネカは、リベラル・アーツを意味する言葉に二重の意味を与えている。ひとつは、「自由人にふさわしい学問」としてのリベラル・アーツであり、もうひとつは、「自由な学問」としてのリベラ

ル・アーツである。セネカは、前者を批判し、後者を推奨する。後者がすなわち、美德を求める学問であり、哲学の準備であり、哲学そのものにもつながるものである。

セネカは、liberalesの意味を前者の意味で捉えて、リベラル・アーツが、自由人にふさわしい「美德」を身につけさせるものではないとして論を展開する。まず、文法学を題材に教師の姿勢を批判する。ホメロスが哲学の学派に属するとする主張をさまざまな学派がそれぞれに異なった観点から行っていることを取り上げ、それらの主張が全て不確かであることを指摘する。また、ホメロスについて問題にされる点が、美德の問題と関わらない微細な問題であることを批判する。続いて、音楽家、幾何学者（測量技術者）、天文学者が批判される。それぞれその対象となる学問分野に通暁することが、人が生きていく上で大切な問い、すなわち美德につながる問いに答えることにはつながらないとされる。

ここでのセネカのリベラル・アーツ批判は、ひろく学問そのものに対する批判となっている。みずからの興味に従って、わからない点や明らかになっていない点をひたすら探究しようとする者は、結果として、隘路に入り込み、その学問がめざすところが本来、何であったかを見失うことがある<sup>10</sup>。そもそも学問研究そのものの目的を美德を求めることであると考えているだろうか。知的な探究心や好奇心は、学問研究を推し進める原動力になりはするが、必ずしも美德という目的を必要とはしない。そういった意味で、美德という目的を持たない、あるいは見失った学問に意味を見いださないとするセネカの姿勢は、現代に通ずる学問一般に対する痛烈な批判となっている。専門教育の場合であれば、たとえ隘路に踏み込んだとしても、それをこそ専門性の深まりと捉えることもできる。けれども、リベラル・アーツにおいては「なぜ学ぶのか」を常に見定めておくことが必要なのである。リベラル・アーツが何のために学ばれるべきなのか、それを実利的な意味を超えたところに求める必要がある。美德（これを人格の完成と言い換えることもできよう）をリベラル・アーツの目的とすることができるのかどうか、そのためにはどのような分野のどのような教育が考えられるのかについて、セネカは再考を迫っている。

## 5. 学術の4分類

セネカは、学術を4つに分けるポセイドニオスの分類を紹介する(Quattuor ait esse artium Poseidonius genera)。世俗的な(volgares et sordidae)学術、楽しみのための(ludicrae)学術、子供のための(pueriles)学術、自由人のための(liberales)学術の4つである。第1の大衆の世俗的な学術は、生活の用を足すためのもので手仕事の技術に関するものである。セネカはそこには何の高潔さも立派さも認めていない。生活手段として役に立つ学術には高い価値を置かない彼の考えは、先述のように古代ギリシア・ローマにおいては一般的な考えである。次に楽しみのための学術については、劇場において観客を楽しませ驚かせるような大道具のさまざまな工夫を例示している。目と耳の楽しみのためのものという位置づけである。次に子供のための学術については、リベラル・アーツに似た要素を含み、ギリシア人が「一般(教養)(ἐγκυκλίους)」と呼び<sup>11</sup>、ローマ人がliberalesと呼ぶ学問だとしているが、その内容についての具体的な説明はしていない。最後に自由人のための学術について、これを、唯一の、より正確に言えば、美德に関心の対象とする自由な学問であるとする。ここで注意すべきは、真のリベラル・アーツが、自由人のための(liberales)学問というよりも、自由な(liberae)学問と定義づけられていることである。そして、美德に関わる学問のみが自由な学問と呼ばれるにふさわしいとされる。

セネカは、先にも触れたように、リベラル・アーツの概念を2つの意味で捉えている。セネカは、ギリシア人が *ἐγκύκλιος παιδεία* (*enkyklios paideia*) と呼称し、ローマ人がそれをリベラル・アーツと呼んでいたような中等教育課程、いわゆる高等教育を準備する予備教育を一方でリベラル・アーツと呼び、高等教育の分野に含まれ、かつ、その対象が美德 (*virtus*) に直接関わる真に自由な学問を他方でリベラル・アーツと呼んでいる。セネカが美德に結びつかないと批判しているリベラル・アーツは前者であり、後者のリベラル・アーツは、セネカのいう哲学につながる。

## 6. リベラル・アーツと諸学問との関係

リベラル・アーツを構成する諸学問である自然学や幾何学などは、哲学を助ける場合があるので、哲学 (*philosophia*) の一部をなすと言えるのではないかという問いに対して、セネカは食物が体を助けるからといって身体の一部とは言えないのと同様、リベラル・アーツを構成する諸学問は哲学の一部ではないとする。そして、同じ自然現象を扱うにしても、哲学者は原因を探究して解明するが、幾何学や天文学は現象を測定して明らかにする点に違いがあり、哲学は何一つ他に依存せず、みずからの基礎の上に築き上げられると述べる。すなわち、根本原理を哲学が探究し、それに依拠して幾何学などの学問が成り立っていると考えるのである。セネカは、このような論法で、リベラル・アーツに含まれる諸学問と哲学とを峻別する。そして、人間の精神の成長に寄与する学問は哲学のみであるとする。その他の学問、リベラル・アーツに属する諸学問は、人間精神の成長との関わりを、哲学を通じた間接的な形でしか持ち得ないとセネカは述べている。そして、セネカは、くりかえし、実際に世の中で教えられているリベラル・アーツと自らの考える真のリベラル・アーツの違いを主張し、何がリベラル・アーツであり、何がリベラル・アーツではないかを明らかにしていく。

## 7. 哲学は何を探究するか

セネカは、魂を完全にすることは「善と悪に関する不変の知識 (*scientia bonorum ac malorum inmutabili*)」のみであるとし、それを探究するのは「哲学」のみであるとする。そのうえで、美德のそれぞれについての検討を始める。勇気、信義、自制心、人間愛、純朴さ、慎み、節度、質素、儉約、仁慈といった美德に対し、リベラル・アーツがこのような美德を教えるものではない、リベラル・アーツがなくても知恵に至ることができる指摘する。なぜなら、「知恵は学識の中にあるわけではないのだから (*cum sapientia non sit in litteris*)」、学識をもたなくても知恵ある賢者になれるのである。そして、知恵が授けるのは、「実際の行いであって言葉ではない (*Res tradit, non verba.*)」と言う。

こうして、リベラル・アーツという学術と知恵が分離され、学術とは別次元の知恵の営みとして、哲学の姿を浮かび上がらせるのである。哲学で問われるべきこととして、神々と人間、過去と未来、永遠、時間、宇宙、魂など、問うべきことや学ぶべきことが多いことをセネカは指摘し、これらの知識のためには、魂に自由な広い空間が必要であるとする。なぜなら、美德は狭い場所には入ろうとせず、偉大なものはゆったりとした空間を必要とするからだとする。さらに、学問的知識は必要不可欠なものだけを保持するよう勧め、十分な程度以上に多くのことを知ろうとするのは一種の放縦だとす

る。さらに、病気、公的な仕事や私的な仕事、睡眠などに費やされる時間の多さと寿命の短さを考えると、それほどたくさんのお金を取ることはできないとする。

真のリベラル・アーツがいわゆる学問探究としてではなく、あくまでも人間にとっての根本問題を正面から捉えて、みずから考え続けるということに意味があり、学問探究を超えた性格をもつべきであることが明らかにされる。つまり、根本問題を考え続けることそれ自体が、真のリベラル・アーツなのである。

セネカは、現代の大学におけるリベラル・アーツが本来どのような方向性をもつべきかについての示唆を与える。しかし、セネカのいう真のリベラル・アーツは、大学の中にカリキュラムとしてとどまるものではなく、人間の生きる姿勢そのものへと転化されているのである。そういった意味からすれば、大学のカリキュラムとしてのリベラル・アーツそのものが、セネカの考える真のリベラル・アーツとは異質なものだということもできる。セネカのリベラル・アーツは、「崇高で、力強く、気宇壮大な学問 (Hoc est sapientiae, sublime, forte, magnanimum.)」である。もしも、日本の大学の現行システムのなかでセネカの主張するリベラル・アーツを取り扱おうとすれば、まず教師がそのような人生の根本問題と直接向き合っている哲学者である必要があり、自らの人生において直面し、考え続けてきた根本問題を学生と語り合うような、そして、教師の知識や思考が学生の知識や思考と切り結ぶ形でお互いに高められていくべきものでなければならないということになる。

## 8. 哲学者批判

セネカは書簡の最後に、美徳を追究すべき哲学者に対しても批判の目を向けている。本来であれば、セネカのいう真のリベラル・アーツの担い手になるべき哲学者に対しても批判の矛先を向けるのである。哲学者自身でさえも、リベラル・アーツの学者たちと張り合い、余計な事柄を哲学の中に取り込んだというのである。そして、プロタゴラス、ナウシパネス、パルメニデス、ゼノン、ピュロン派、メガラ派、エレクトリア派、アカデメイア派といった哲学者や哲学諸派がそれぞれ異なる議論をおこなっていることをあげ、それらの知識は役立ちそうになく、また知識に対する希望をも奪うとして、これらも余計なリベラル・アーツのなかに放りこむように言い、このような状態に対して、誰に対して怒りをぶつければよいのかと問いかけて書簡を終える。

セネカの書簡の最後の部分での哲学者批判は重い課題を投げかけている。結局のところ、セネカのいう真のリベラル・アーツが実現することが極めて困難であることを示唆しているからである。哲学者と世に認められている学者であっても、結局は批判されるべきリベラル・アーツに取り込まれてしまう。

批判されるべきリベラル・アーツから抜け出し、真のリベラル・アーツがどうすれば実現されるのか、その具体的な道筋まではセネカは示していない。

## 9. まとめ

リベラル・アーツの七自由文芸、なかでもトリヴィウム (trivium: 文法学、修辞学、論理学) の伝統をもたない日本の大学にとって、西欧の伝統に裏打ちされたリベラル・アーツの概念を教養教育に取り入れようとするとき、その表面的な部分だけを受け継ぎ、西欧のリベラル・アーツの精神的な背景を見失ったものとなる可能性がある。<sup>12</sup> 一方で、日本の大学を歴史的に見れば、イソクラテス、キ

ケロ、クインティリアヌスの系譜をたどる修辞学よりもむしろ、ソクラテス、プラトンに連なる哲学を懸命に取り入れてきた伝統がある。加えて、日本人は徳を重んずる儒教道徳を道徳観の根本に長く据えてきた。そのため、リベラル・アーツが本来は美德を目指すべきものであるというセネカの主張は、感覚的には理解されやすいように思われる。しかし、日本の大学におけるリベラル・アーツの考え方はさまざまで、セネカの憂慮した方向へと進んでいるようにみえるものも多い。セネカの主張する真のリベラル・アーツを日本の大学の教養教育として定着させることは制度的に言っても難しいように思える。もともとリベラル・アーツに相当する教育は古代においては、高等教育を準備する中等教育段階で提供されていたものである。それを考えると、日本においては、むしろリベラル・アーツに親和性のあるのは高等学校教育である。高等学校教育が受験にとらわれず、科目の細分化をやめて教科を大局的に捉え、すべての教科内容をまんべんなく、その教科に内在する思想や思考法を学ぶようにカリキュラム設計するだけでも、セネカの真のリベラル・アーツに近づくことができるのではないか。そうして、大学は大きな制度改革なく専門教育に特化できる。

古代人の感覚を共感的に理解することは難しい。しかしながら、歴史的に古代に淵源を持つリベラル・アーツの背景には、セネカの考えたような学術観を踏まえないと理解できない部分が多いこともまた事実である。今一度、考え直すべきときが来ていることを、セネカが訴えているように思えてならない。

---

#### 引用・参考文献

- ハスキンス, C.H. (2009) 『大学の起源』(青木靖三・三浦常司 訳) 八坂書房. (Haskins, C.H. (1957). *The Rise of Universities*. NY: Cornell University Press.)
- Hornblower, S., Spawforth, A., & Eidinow, E. (Eds.). (2003). *The Oxford classical dictionary*. NY: Oxford University Press.
- Howatson, M. C. (Ed.). (1989). *The Oxford companion to classical literature*. NY: Oxford University Press.
- 廣川洋一 (1985) 「〈自由三学科〉の成立」『新・岩波講座哲学14 哲学の原型と発展 哲学の歴史1』, 320-347.
- Kimball, B. A. (1986). *Orators & Philosophers: A History of the Idea of Liberal Education*, expanded edition. NY: College Entrance Examination Board.
- 前之園幸一郎 (1983) 「セネカの教育思想：Ad Lucilium epistulae morales を中心にして」『青山学院女子短期大学紀要』37, 138\_a-115\_a.
- 松浦良充 (2004) 「リベラル・アーツ」をめぐる理解と誤解——比較大学・高等教育史の視点から」『教育文化』(13), 111-87. (16-40) .
- マルー, H.I. (1985) 『古代教育文化史』(横尾壮英・飯尾都人・岩村清太 訳) 岩波書店. (Marrou, H.I. (1948). *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*. Paris: Le Seuil.)
- 森一郎 (2008) 「リベラルということ——自由学芸の起源へ」『東京女子大学紀要論集』59 (1), 1-22.
- 納富信留 (2014) 「古代ギリシア・ローマにおける「自由文芸」の教育」『中世思想研究』(56), 70-79.
- Nussbaum, M. C. (1998). *Cultivating humanity: A Classical Defense of Reform in Liberal Education*. MA: Harvard University Press.
- Rice, J. P. (2006). What Should We be Teaching? Nussbaum, Seneca, and the Liberal Arts. *Modern Language Studies*, 36 (1), 50-53.

テレングト, アイトル. (2013) 「東洋における修辞学の変遷：日中の修辞学の比較を兼ねて」『北海学園大学人文論集』(54), 61-82.

八巻和彦 (1980) 「Artes Liberales における〈目的〉と〈方法〉の緊張——セネカとアウグスティヌスを中心にして」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』(29), 1-14.

#### テキスト・注釈・翻訳（セネカ書簡88）

Seneca, L. A. (1970). *Seneca: In Ten Volumes. Epistles; 66-92.* (Richard, M. Gummere, Trans.). MA: Harvard University Press.

Stückerberger, A. (1965). *Senecas 88. Brief: Über Wert und Unwert der freien Künste: Text, Übersetzung, Kommentar.* Heidelberg: C. Winter.

Campbell, R. (1969). *Seneca: letters from a Stoic.* Penguin.

大芝芳弘 (訳) (2006) 『セネカ哲学全集 6 倫理書簡集II』岩波書店.

茂手木元蔵 (訳) (1992) 『セネカ道徳書簡集—倫理の手紙集— (全)』東海大学出版会.

#### テキスト・翻訳（その他の作品）

*Perseus Digital Library*. Tufts University. (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/>) (最終閲覧日：2019年9月27日)

神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久 (訳) (2018) 『アリストテレス全集 17 政治学家政論』岩波書店.

片山英男 (訳) (2000) 『キケロー選集 6 修辞学I』岩波書店.

大西英文 (訳) (1999) 『キケロー選集 7 修辞学II』岩波書店.

中務哲郎・高橋宏幸 (訳) (1999) 『キケロー選集 9 哲学II』岩波書店.

大西英文・小川正廣 (訳) (2006) 『セネカ哲学全集 2 倫理論集II』岩波書店.

---

#### 後注

- 1 本論文では、セネカの用いるラテン語の *studia liberalia* 及び *artes liberales* を、「リベラル・アーツ」と称する。
- 2 「【参考】我が国の大学における教養教育について」（中央教育審議会（2002）「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」所収）
- 3 *trivium*（文法学、修辞学、論理学）と *quadrivium*（算術・幾何学・天文学・音楽学）からなる。
- 4 ハスキンス (2009) pp.59-74; Kimball (1986) pp.13-29.
- 5 キケロ『発想論』1.35.  
暮らしぶりについては、どの家で、どうやって、誰の管理の下に教育されたか、初等教育ではどの教師にいたか (*quos habuerit artium liberalium magistros*)、誰を人生の師と仰いだか、どんな友人とつきあっているか、どのような仕事や職業や技術に従事したか、一家をどのように管理しているか、家庭生活はどのようなものであるか考察する必要がある。(片山英男訳)
- 6 弁論重視の伝統は、古代ギリシアのイソクラテスからキケロ、クインティリアヌスからその後につながる系譜があるが、Kimball (1986) pp. xii-xiii. にその系譜がわかりやすくまとめられている。
- 7 テレングト (2013) によれば、19世紀末から1920年代まで日本の修辞学は急速に発展して、欧米の修辞学を導入しながら現代日本語の形成の文章の規範化を促し、一大体系を作り上げ、初等教育に開花したが、その



後、急速に衰微したとされている。

8 アリストテレス『政治学』1337b4-14.

しかるに、役立つものについては、必要不可欠なものを教えるべきことに疑いはないが、ただし、すべてを教えるべきでないことも疑いない。自由人の仕事とそうでない者の仕事が分けられているのであるから、習得すべきは、役立つものを習得した者を卑俗にしないものに限られるのは明らかである。したがって、自由人の身体や魂や思考を、徳の実践や行使には役立たないものにする仕事や技術や学びを、卑俗とみなすべきである。それゆえに、身体を悪くさせるような技術や、金で雇われた仕事を卑俗であるとわれわれは呼ぶのである。なぜなら、それらは思考を余裕のない低級なものにするから。自由人にふさわしい知識に関しても、何かにある程度まであずかるのは自由人にふさわしくないわけではないが、しかし、厳密さを求めて過度に本気で取り組めば、述べられた害を被りやすい。

また、人が何のために行ったり学んだりするかも、大きな違いを生む。自分のためや友人のため、徳のゆえに行うのは、自由人にふさわしからぬことではないが、しかし、同じことを他人のゆえに行う人は、日雇い人や奴隷の仕事を行っているのとたいは思われるだろう。(瀬口昌久訳)

キケロ『義務について』1.150

さて、職人その他の生業について、どれが自由人にふさわしく、どれが卑しいとみなされるべきか、われわれはほぼ次のように教えられてきている。第一に、人々の憎しみを買う職業は褒められない。たとえば、徴税吏や貸し金業である。賃金労働者の中で技能ではなく、力仕事のために雇われる者たちの生業は自由人にそぐわず、卑しい。というのは、これらの者たちの場合、他ならぬその賃金が奴隷となることの見返りだからである。また、卑しむべきは、商人からものを買ひ、それをまたすぐに他へ売る者たちである。というのも、彼らが少しでも儲けようとすれば相当の嘘をつかなければならない。まったく、はったりよりも恥すべきものはない。(高橋宏幸訳)

9 セネカ『恩恵について』3.18.2

美德は誰にも扉を閉ざしていない。それは、自由人にも、解放奴隷にも、奴隷にも、王にも、亡命者にも、すべての人に開かれていて、すべての人を受け入れ、すべての人を招き入れる。美德は家柄や財産を選別せず、裸の人間だけで満足する。(小川正廣訳)

10 注7に引用したアリストテレス『政治学』1337b15で「厳密さを求めて過度に本気で取り組めば、述べられた害を被りやすい」(瀬口昌久訳)とされているのも、セネカの指摘と通ずるものがある。

11 ἐγκύκλιος παιδεία (enkyklios paideia) について、マルー (1985) は、Encyclopédieという言葉から連想されるような包括的な知ではなく、ヘレニズム期のギリシア語で「ふつうの、日常の、だれもがみとめる教育」を意味する語で、その概念はかなり輪郭がぼやけたものであり、この概念は、教育そのものとは関係せず立派な人物になるにふさわしい教養を意味し、中等教育と高等教育、学校教育と私的な教育のすべての成果の集積である「一般教養」と考える捉え方と、さらに高次の分野での教育や教養を身につけるための「基礎教養、予備教育」、すなわち、中等教育過程の理念と捉える捉え方があると指摘している。

12 西欧でもリベラル・アーツの歴史的意味が失われつつあり、何のためにリベラル・アーツを学ぶのかが問い直されている。TED2009でペンントン大学学長であったLiz Colemanは“A call to reinvent liberal arts education”と題してリベラル・アーツ教育の改革を訴え ([https://www.ted.com/talks/liz\\_coleman\\_s\\_call\\_to\\_reinvent\\_liberal\\_arts\\_education/transcript](https://www.ted.com/talks/liz_coleman_s_call_to_reinvent_liberal_arts_education/transcript)) (最終閲覧日：2019年9月27日)、Nussbaum (1998) は、セネカに示唆を受けた新しいリベラル・アーツの構想が述べられている (pp.293-301.)。

- \* 本論文におけるセネカ書簡88の引用はすべて大芝芳弘訳による。その他のギリシア・ラテン作品の引用にあたっては、翻訳者を注記した。書簡88以外のギリシア・ラテン原典引用はPerseus Digital Library (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/>) 所収のものを利用した。